子どもの診られる力を育てる
札幌フォーラム２０１７のご案内

　子どもが自分のいのちと体について関心を持ち、病気や治療について自分の症状を医療者に確かに伝える力を身につけることの大切さを広く伝えたいと、2015年10月、当センターに教育関係者をメンバーにした「子どもの診られる力を育てるプロジェクト」を設置しました。

　プロジェクトでは子どもたちがどのように医療者と関わるのか、医療者もまたどのように信頼関係を構築すべきかについて、研究協議を行ってまいりました。「いのちとからだの１０カ条」（NPO法人ささえあい医療人権センターCOML発行）を具現化した授業計画の提案、小学生・中学生との公開授業、小学校低学年・高学年、中学生を対象とした「アンケート調査」の実施、さらに昨年４月札幌でシンポジウムを開催し、模擬授業での課題提起や医療者と学校の養護教諭などとの研究協議を行いました。

　このフォーラムでは、アンケート調査の分析から明らかになった「子どもが求める医療者」について、どのように受け止めて臨床の場に活かすか、さらに授業を含めた学校への働きかけにどのように取り組むことが出来るのかをテーマにグループワークを行います。まとめのパネルディスカッションでは、今後この事業を推進するにはどのようにしたらよいのかについてアイディアをいただきたいと考えております。

　「子どもの診られる力を育てる」という新たな取組みについて、ご理解と関心のある方々の参加をお待ちしております。

■ 日　時：2017年10月7日（土）　13時30分～17時

■ 会　場：北海道自治労会館　第4会議室

〒060-0806 札幌市北区北６条西７丁目５－３

■ 参加費：無料

■ 申込方法

　電話あるいはメールのどちらかより、必ず以下3点を明記の上ご連絡ください。

　①氏名
　②所属
　③連絡先（電話番号またはE-mailアドレス）

-申込締切-

平成２９年 １０月３日（火）

■ 申込み・問い合わせ先

北海道家庭医療学センター
事務局（担当：桑原）
TEL:011－374-1780
E-mail: info@hcfm.jp
HP:
http://www.hcfm.jp/mirareru_report.html

たくさんのご参加お待ちしております！

主催　医療法人北海道家庭医療学センター

プログラム

①グループワーク１

「子どものかしこく診られるためのアンケート調査から見える求められる医療者のあり方を考える」

司会：プロジェクトリーダー　鳥居一頼

秋田県内A市で同一地域の小学校2校、中学校1校の子どもたちのアンケート調査結果分析を元に、発達段階の違いから見えてくる意識の違いや態度の変化を読み解く。

②グループワーク２

「診られる力を身につけるために、どのように学校や保護者に働きかけるのかを考える」

司会：北海道家庭医療学センター・栄町ファミリークリニック　院長　中川貴史

学校での保健指導の中には「診られる力を育てる」という内容はない。子どもが「いのちと病気」を体験的に学び考えるために、医療者、教師そして保護者への問題提起のあり方を協議する。授業づくりやPTAでの講演など、知恵を絞りたい。

③パネルディスカッション

「子どもの診られる力を広く伝えるために私に、私たちに出来ることは何かを考える」

進行：北海道家庭医療学センター理事長　草場鉄周

参加者のそれぞれの立場で「子どもの診られる力」を育てるために、どのような取組が可能なのかを考えます。パネリストは、参加者から指名、ご協力をお願いします！

参考資料

北海道新聞　2016年5月15日朝刊14面

自分の症状 自分で説明

子ども 賢く受診

頭が痛い、気持ち悪い、熱が出た—。子どもが医療機関にかかるとき、一緒に行った親が症状を説明する場合が多いが、子どもが自ら進んで親や医師らに体の状態を話す力も大切だ。自分の体や命の大事さを考えさせることで、こうした力を引き出すシンポジウム「子どもの診られる力を育てる」が札幌で開かれ、幼稚園児や小学生が模擬授業を受けた。（編集委員　中村康利）

自分の体を守るため、病状などを自分で話す大切さを模擬授業で学んだ子どもたち

主催は北海道家庭医療学センター（札幌）で4月30日に開かれた。医師の草場鉄周理事長が「患者中心の医療を行うため、医師教育に取り組んできた」立場から、「医師と患者の考えの違いを埋めるには、医療者側の努力に加え、患者も（病気や治療について）聞いてほしい話を説明することが大切」と述べた。こうした考えから、子どもにも自分の症状を話す大事さを学ばせる機会を設けたいと、模擬授業をした。

参加したのは札幌などの幼稚園児から小学6年までの約20人。藤女子大非常勤講師（福祉教育）の鳥居一頼さんが先生役を務めた。

鳥居さんから、どんな医師が好きかを尋ねられた子どもたちは「注射を無理やり打たない」「優しく話してくれる」「病気を治してくれる」などと回答。逆に嫌いなタイプは「話を聞いてくれない」「間違った診断をする」「目を見て話してくれない」などだった。

鳥居さんは「病気になったらお父さん、お母さんに伝えることができるかな」と質問。そして「自分の体を守るのは自分自身。医者は病気やけがを治すときの大事なパートナー。病院に行ったら、けがや病気について自分で詳しく言ってみよう」と呼びかけて、授業を終えた。

◇

医師と連携 模擬授業

シンポジウムでは、患者と医療者がよりよい関係を築くために電話相談なども行っているNPO法人、ささえあい医療人権センターCOML（大阪）の山口育子理事長も講演した。

命や体を守るため毎日の生活で大切にするポイントをまとめた小学生向けの小冊子「いのちとからだの10か条」＝表＝も紹介。例えば「食事・すいみん・手洗い—予防が大事」の項目では食後の歯磨き、バランスのとれた食事など、病気やけがの予防に必要な事柄をイラストでわかりやすく説明している。

さらに、受診時に「早くサッカーの練習ができるようになりたい」といった治療の具体的な希望を医師に伝えることや、指示通りに薬を飲み、もし異常があれば大人にきちんと話す—などと記している。

講演で山口さんは、小冊子を読んだ小学3年の男の子がインフルエンザにかかったとき、自ら症状を医師に伝えようと決め、発熱した日などを説明し、頑張って薬を最後まで飲んだというエピソードを紹介した。

小冊子はA6判24ページ。COMLのホームページ（http://www.coml.gr.jp/）で閲覧でき、希望者に無料で配布している。問い合わせはCOML☎06・6314・1652へ。

いのちとからだの10か条

①いのちとからだはあなたのもの
②食事・すいみん・手洗い—予防が大事
③からだの変化に気づこうね
④お医者さんには自分で症状を伝えよう
⑤わからないことはわかるまで聞いてみよう
⑥自分がどうしたいかを伝えよう
⑦治療を受けるときはあなたが主人公
⑧お薬は約束守って使おうね
⑨みんな違いがあって当たり前
⑩だれのいのちもとっても大切

北海道家庭医療学センター　広報誌Palette　2015年12月号

「診られる力を育てる」プロジェクト

理事長　草場鉄周

センターでは「診られる力を育てる」プロジェクトをスタートします。

このプロジェクトは、医療の場での一方通行になりがちだったコミュニケーションを、より患者さんが主体となる場に変えることを目指し、子ども達に「診られる」ための力を身につけてもらう場を創出していくことを計画しています。

例えば、医療は医療職が患者さんに提供するサービスですが、健康づくりは患者さん自らが積極的に関わることでより良い結果が出ます。つらい症状に対する不安感や心配事を医療職に伝え、気になる検査や望む治療などの期待を知らせることは、本当の意味での「患者中心の医療」を実現するのに大きな意味を持つと言えましょう。また、子どもたちが医療職ひいては医療をどのように捉えているかを知ることは、私たち医療職に更なる気づきを与え、30年、40年後の医療の場を変えていく原動力になるかもしれません。

息の長い仕事になります。多くの皆様のサポートを頂ければ幸いです。

また、プロジェクトの中心メンバーとして活動していただいている鳥居一頼先生から、実際に子ども達へ実施した授業のレポートもいただいております。合わせてご覧ください。

「診られる力を育てる」プロジェクトに参加して

愛知淑徳大学非常勤　講師　鳥居一頼

話を聞き漏らすまいと身を乗り出す子どもたち。写真は、10月19日秋田県鹿角市内での小学２年生との「いのちとこころ」の学習風景であり、私のライフワークとしての「福祉学習」の現場です。

9月29日には、プロジェクトが承認されて初めての授業を千歳市内の小学３年生と行いました。

「病院に行ったら、お医者さんはやさしく『いたかったでしょう』と心配してくれました。わたしはそんなお医者さんが好きです。なのでケガをしている人に、『大丈夫？』と言ってあげられる人になりたいです」

自分のいのちやからだのことだけではなく、医師や看護師を通して「こころのあり方」に気づく力こそが「診られる力」を育てることだと、子どもから教わりました。私の世界は子どもと共に限りなく広がります。可能性に満ちたプロジェクトをHCFMの指導の下メンバーと共に推進していきたいと思います。